解説

空しさを夢に変える人

大谷佳子『夢の種蒔き――私流遊書』に寄せて

鈴木比佐雄

1

大谷佳子さんの筆文字の言葉は、あるがままであり、最もシンプルであろうとする初源の言葉だ。それはどんなジャンルにも当てはめることが出来ない、書くことの原点に遡っていこうとする純粋な試みだ。まっさらな和紙の右上の一文字から筆の風が吹き、いっきに大谷さんの精神の言葉が綴られていく。書かれた言葉には、心臓の音や深呼吸をしている大谷さんの肉体のリズムが宿っている。と同時にその言葉には、森や大地や宇宙や家族や人間社会など森羅万象を駆け巡る命の風が背後で渦巻き、それらの命から汲み上げられたエネルギーが満ちている。そんな豊かな初源の言葉は、優れた哲学者が生涯を費やして思索した本質的な言葉と重なってくる。その意味で大谷さんの言葉は、最も単純で最も深いところに至りつこうとする希望の言葉を目指している。あらゆるしがらみや先入観を捨て去り削ぎ落とし、無垢のただ中で、最も大切だと思われることを「心遊ばせ」ながら書いたものが、今回の『夢の種蒔き――私流遊書』だ。大谷さん個人の言葉でありながら人為を超えて、自然と渾然一体となった境地から生まれてくる言葉そのものに出会うことが出来る。このような大谷さんの表現行為は、心や魂や宇宙の神秘の触れた時に手掴みで書き記したいという衝動を感じさせてくれる。

大谷さんはどうしてこのような独自の表現形式を生み出していったのだろうか。これまでの多彩な詩活動やその著作物を紹介してみたい。大谷さんは一九四六年に埼玉県秩父郡大河原村で生まれた。現在は子育てを終えてご夫婦で比企郡小川町で暮らしている。父母や祖母は、一三〇〇年もの歴史がある地場産業の小川和紙の「紙すき屋」だった。大谷さんは和紙に筆文字を書く時に、紙漉きの母、紙干しの父、楮さらしの祖母などの作業をする家族に再会しているのだろう。ためし書きをせずに一回限りの瞬間に一回限りの筆文字を書き切るのが大谷さんの「私流遊書」である。「私流遊書」とはきっと、大谷さんの家族や故郷に生きるものたちを含めた森羅万象のエネルギーを集め我がものとし、しかも自在に心遊ばせて、瞬間に立ち上がる言葉とイメージを忠実に再現するより良く生きる行為であり、大谷さんがこの世界で生きる証なのだろう。

2

大谷さんには三冊の既刊詩集と一冊の詞集がある。一九八六年の『境界』、一九九二年の『花びら紡ぎ』、一九九七年の『小瀬田峠』の三冊の詩集と、

二〇〇三年に刊行した詞集『風と神様からの賜いもの』の四冊を紹介してみたい。

第一詩集『境界』では故郷が都市化されていき、不動産として切り刻まれていくことにためらいを抱いていく。だがその変貌する風景の中に変わらないかつての家族や地域の人びとの風景を透視しようと試みている。例えば「秋野には」という詩の冒頭の一連三行「秋野には／おんなたちの匂いがあり色がある／そして　おんなたちの詩がある」のようにかつての母たちが活躍した女たちの光景を今に生かそうとしている。

第二詩集『花びら紡ぎ』では、愛する人との離別からの寂寥感や空しさに捉われて苦悩しながら、その空しさなどを直視していこうとする。冒頭の「空」という詩の一連三行「つばめが帰ってきた　空／母が旅立って三七日がくる／昨日　息子が一人立ちしたいと家を出た」から始まり、最終連は「いま　四月のなか／四十四歳の私は色のない穴をほり／空を埋めきれずに佇んでいる」で終わっている。大谷さんは、きっと自分が追求していた現代詩の手法で表現出来そうもない「空しさ」を抱え込んでしまったように思われた。

第三詩集『小瀬田峠』では、故郷の秩父郡や比企郡に連なる「小瀬田峠」に向かい自らの原点を辿っていく詩集だ。そして今後の自らの課題を確認してその可能性を垣間見せている。詩「小豆」という詩があるので引用してみる。

小　豆

誰に逆らったわけでもなく
世をすねたわけでもないだろうが
さやから飛び出してしまった小豆が数粒
穫り入れのすんだ畑のそこここにポツリ　ポツリ
小春の陽を真ん中に浴びている

赤い皮の内に根も葉もしっかり抱えているいのちの粒
しばらくの間そこに転がって気ままにいるといい
空の気分や風の勝手や人間の欲や愛などが
命のあり方や行方を決めてくれる時まで
好きにしていたらいい
あたたかな陽のなかで
誰にも遠慮などせずに

この詩を読んでいると大谷さんの視線は、地球に降り注ぎ命を育む太陽光線のような慈愛に満ちている。小豆に「好きにしていたらいい」と心から語りかける精神は、「空しさ」を突き抜けて、森羅万象によって生かされる新たな心境に向かって

いったと思われる。

二〇〇三年に刊行した詞集『風と神様からの賜いもの』は、今回の『夢の種蒔き』と同様に筆文字の作品が十篇ほど収録されていた。その他の約一〇〇篇の言葉は、筆文字ではなく短詩のように活字化されたものになっていた。その中で「言葉は百薬千薬　誰もが言葉の薬剤師／いつも相手の心に効く薬屋でいたいね」という言葉の中には、三冊の詩集の読者である現代詩の読者だけでなく、普通の人びとに自分の言葉を届かせたいという大谷さんの思いが読み取れる。

大谷さんは、その他に作詞や俳句も書き続けている。中国政府の公式な集まりで、日中友好を記念して大谷さんの詞で作曲された歌が歌われたこともあった。また剣道三段、書道五段でもあり、好きなことを反復しながらその道を突き詰めてしまう、しなやかで強い精神力が備わっていると思われる。そんな多彩な能力が相互に影響し合い総合的に融合しあって今回の『夢の種蒔き――私流遊書』のような独自の表現が可能になったように思われる。

3

大谷さんとの出会いは、二〇一一年に『世界を動かした女性　グエン・ティ・ビン』をコールサック社から刊行した平松伴子さんからの紹介だった。大谷さんと平松さんは親友であり、平松さんの本作りをしている最中に紹介されて電話でお話をしたことがある。その際に原稿が出来るのをゆっくりお待ちすることにした。それから一年が過ぎて平松さんから原稿がある程度まとまったので、三人で会いたいとの電話があった。私は一年前に送られた数点の筆文字の作品を読んでいただけであったが、それが今回送られた作品は数えてはいないが、数百点はあると思われた。私はそれらを数週間かけて味読して、何か読むたびに心が洗われて、自分の中の命に直接的に語りかけてくる感動を覚えた。大谷さんの筆文字の言葉は、現代の痩せ細った貧しい言葉を甦らせる何かを秘めていると直観した。そして大谷さんの魅力を多くの人びとに知ってもらいたいと願って編集作業を開始した。

今回の『夢の種蒔き――私流遊書』（七十四篇、カバーとあとがきも含む）は、七章に分かれている。一章「心遊ばせ」十二篇の冒頭の「書きながらあそび」は、大谷さんの根本精神である「遊書」が語られている。この方法論が分かれば、大谷さんの筆文字の一字一字がいかに生きていて、魅力的であるかが感じられるだろう。「一人でいても／にぎやかな天地」や「一人あそびの大空舞台」などの「心遊ばせ」る仕方は、精神を磨いてくれる気がする。家族や友人への「連れ合い」「連れ友」との絆や縁への感じ方も、最も大切なことを伝えてくれている。

二章「夢の種蒔き」十篇は、人間が夢を抱く存在であり、夢を生きる存在であることを、「夢の種蒔き」という独自な言葉で言い表している。そして夢は一人で見るものでなく、愛する人たちと見ることによって「夢は／さらに大きく／ふくらむ」

と語る。「ぼうふらさん」にも「蚊になる夢」があり、「ガンバレ！」と励ましている大谷さんの精神は、とても素晴らしく、命との対話を実践されていることがよく分かる。

三章「人生　いじめられに　感謝」十篇は、心優しき大谷さんが子供の頃にいじめられていた存在であることを明らかにしている。しかし今は「お蔭様で／身についた／孤独力」と言い、逆にそうされたことによって、孤独力を得たことに対して感謝をしている。いじめることに快感を覚える醜い感情を抱く人間たちを恨むのではなく、その結果自分には孤独力が身に付いたのだから、感謝したいと語る。そしてマイナスをプラスに転換していき、小さな私を解き放って大きな私に移行していくことに人間の素晴らしさを感ずる。

四章「私は風」十二篇は、「私は風」と言えるような大きな私に出会っていく瞬間を、風を通して例えば「天地一体の／秋に／分け入れば／私は風」のように淡々と語っていく。風の力を自分の力に替えていき、「私は風」と言えるまで心を澄ませていき「自他一体」や「万物との一体感」へ至る心境が掬い取られている。

五章「命を磨いて」十篇は、人は命を持っているが、その命に気付いていないのではないかという問いが発せられている。真に命に気付くには、命を磨いていないと命は輝きを失ってしまうと語っている。「この大空の下は／汗かいて／働くところ／心を／遊ばせるところ／吹く風に／命を磨いて／もらうところ」と大谷さんは、あらゆる存在の命の輝きを願い賛美しようと考えている。

六章「森羅万象に合掌」十篇は、自然である森羅万象への感謝を抱くことの大切さを「森羅万象に合掌」という表現で示している。風の音も雨の音も小鳥のさえずりも、全ての自然の営みに感謝して、自らの自然に生かされていることが、生きることの原点であることを指し示している。自然に生かされていることを実感するためには自然と遊ぶ心が大切であることを実践している。

七章「いい明日になあれ」八篇は、今の瞬間や今日の中に「明日」や「夢」という希望を見出す方法を書き記している。「一読十笑百学／千話　万歩」や「自分未踏の／楽しみを持って」明日を生きることを提言している。

このようにこれほど希望と夢と明日を一致させて今を生きる勧めを淡々と、しかも熱く筆文字で書き記す書は、今まで存在してこなかったのではないか。東日本大震災の3・11以後に肉親・知人を亡くされたり、家も仕事も故郷も失くしてしまった多くの人びとやその関係者たちは、想像を超えた「空しさ」を未だ抱き続けているだろう。そんな「空しさ」を抱えた人たちや、人知を超えた自然を直視し自然の再生を願って生きようとする多くの人びとに、大谷さんの「空しさ」を「夢（きぼう）」に変えようとする筆文字の言葉を味読して欲しいと願っている。